

藤山 正二郎 復興する儀礼と民族性

■ 出張日程：2004年9月9日～20日

■ 訪問地：新疆ウイグル自治区ホータン

■ 報告

西部大開発の波はホータンまで及び、市内の中心街に地下街が建設中であつた(写真1)。建設の必要性もよくわからないが、資金のトラブルで工事が長引き、交通の邪魔になり迷惑している様子であつた。また古い劇場も壊され、清の時代の城壁跡が観光のためか再建されていた(写真2)。戦後の新疆の発展を政策的に支えてきた新疆生産建設兵団は改革開放の市場経済、西部大開発でも着実に経済的、政治的力を増大してきているように思える。新築されたこの第14師の建物はホータン市内で最大のビルである(写真3)。古いままだつた博物館も場所を変えて新築中であつた。その目の前に新しい高層のウイグル医学病院が建っている。外部の者から見ると、ホータンでもイブン・シーナなどイスラム医学者が知られており、イスラム医学の影響は強いように思えるのだが、どの人に聞いても、ウイグル医学は仏教時代からこの地で発展したという答えが多い。



数々の歴史を記してきた有名なホータンの紙は今年作るのを止めたということであつた(写真4)。ホータン市の西、カルカッシにダスタン(叙事詩)をラワップにのせてバザールなどで歌う人を訪ねる(写真5)。この仕事の希望者は多い。教え子は27人いるという話だつた。



今回の調査のテーマの1つは「復興する儀礼」であつた。改革開放以来、経済的な余裕を儀礼に向ける人が多くなつてきた。スナットイという割礼のお祝いも家族だけでしていたのだが、レストランなどで盛大にすることもまれではない。結婚式など人生にまつわる儀礼、バラアートなどの年中行事

的な儀礼、マシュラップなどの祭りが盛んになってきている。ホータン市内ではトイザリカ(結婚式場)が新築されて、何百人もの招待客を集めている。結婚式が華美になって、経済格差を際立たせてはまずいと、政府側からの進めもあり、また、質素を旨とするイスラムのワハブ派の考え方もあって、式があまり贅沢にならないようにとの思いはある。しかし、人とのつながりを大切に思い、歌や踊りの好きなウイグル人にとっては、結婚式などの皆が集う機会は重要である(写真6)



結婚式などでエスニックな区別はホータンではかなり厳格である。いままでは、ウイグル人の結婚式に漢人を見ることはできなかった。しかし、今回、ホータン賓館でウイグル人の結婚式に客はほとんど漢人である式が行われていた。漢人のためだけに設定した披露宴である。地方政府の幹部の関係者の式のように、民族団結の現われなのだろう。ホータンの中心部につくられた毛沢東とコルバン老の握手の像とおなじ意図である。



マシュラップは団体ではなく、儀礼でもない。どこでやるかみんなに知らせ、集まって踊り、歌い楽しむ宴のようなものである。マハツラ、郷、などのあらゆるレベルで行う。イギットベシがリーダーで、遅刻する、悪いことをする(年上の女性に冗談を言う、タバコを人前で吸うなど)と罰を与える。犬のまねをさせたり、歌を歌わせるなどをさせる。若者のマシュラップは結婚した若者だけが参加できる。年寄りのマシュラップは50歳以上で、宗教的で、古い本を読んだりする、健康に良いことをする。薬の話、ホータンの歴史の話、同じ年の幼なじみが多い。政治の話はしない。費用はイギットベシが持つ、奥さんが得意な料理でもてなす。戦前に比べるとマシュラップは減ってしまった。たくさんの人が集まると政治的に良くないと政府に言われる。その代わりに、政府や会社がイギットベシになって、1万-2万人を集めるマシュラップがよく行われる。イスラムの決まりを厳格に守ってマシュラップに参加しない人もいる。また、男女が共に踊るのも好ましくないという考えもある。病気になる金持ちの人のためのマシュラ



ップもあった。薬のマッシュアップであり、昼夜連続して踊り続ける、病気の人も太鼓をたたき、疲れてよく寝て病気もよくなる。シャーマニズム的な要素もある。

ジュワントイは最初の子が生まれたときに、その妻に対して服などを贈る儀礼である。子供ができて女性として完成したという意味である。子供ができないと離婚も多い。しかし、養子という手段をとる人もある、望まない妊娠の人から実親がわからないようにもらうこともあり、多くは親戚から養子を取る。ジュワントイも戦後、女性の地位が上がり、学歴も高くなり、特に文化大革命以後、政府もこのような習慣を快く思わないこともあり、都市部ではほとんど見られないが、農村部ではしているところもある。

儀礼はそれ自体としては実際的な機能はもたないが、様々な政治的規制を加えられてきた。ウイグル人の共同性、文化が表現される儀礼に規制を加えることは、現実の生活にすぐ支障がでてくるものではないから、ソフトにコントロールすることでもある。文化の表現の手段がなくなることは、ウイグル人のアイデンティティに微妙な変化を生じさせるだろう。